

2012年。旧約聖書のルツ記の学びの2回目です。前回は「祈りつつ患難に耐え」と題して、夫と息子達を失った試練の中でも望みを持ちつつ祈っていたナオミについて学びました。

1. 嫁たちと連れ立って (6～7節)

①ベツレヘムの情報 (6節) ナオミには試練の中でも希望を持つ信仰がありました。しかし、主なる神様は彼女をベツレヘムに戻す導きを与えられました。ナオミの側からすれば、愛する家族を失ったことと、ベツレヘムの食糧事情が好転しているという情報は、地元に戻る道を選ばされました。

②ふたりの嫁といっしょに (7節) ナオミは当初、ふたりの嫁達をともなって、モアブの住んでいた所を出て、ユダの地にもどることにしたのです。振り返ってみれば、疎開してモアブに来て以来、いろいろとナオミには起きました。夫のエリメレクを失うばかりではなく、息子達のマフロンとキルヨンにも先立たれてしまいました。でも考えてみれば、二人の息子達はそれぞれ結婚をしましたので、ナオミはただ一人残ったのではなく、二人の嫁達がそこにいたのです。ルツとオルパでした。そして、彼らはナオミがユダに帰るといえばついてくるほどにナオミを慕ってくれていたのです。

2. ナオミの嫁達への勧め (8～10節)

①自分の母の家に帰りなさい (8節) ナオミはついてきてくれた二人の嫁であるルツとオルパの将来について、ずっと考えていたのでしょう。そして言いました。「あなたがたは自分の母の家に帰りなさい」。要するに実家に帰りなさいということです。どうして父の家ではなく母の家なのか。それは夫を失った彼ら自身の悲しみを癒してくれる母という意味でしょうか。ナオミはこの嫁達が本当によく夫はもとよりナオミにもよくしてくれたことを認めていました。その上で「主があなたがたに恵みを賜るように」と祝福したのです。実家に帰せば異教社会。しかし、どんな時にも主が霊肉ともに守ってくださるようにと祈ったのです。

②再婚の勧め (9節) ナオミは、彼らが主への信仰を捨てないように願いつつ、まだ若い彼らが再婚する道をとるようにと願ったのです。平和で穏健な生活がするようにと勧めたのです。そして、彼らを送り出すようにして口づけをしました。

③二人の反応 (9後半～10節) ルツもオルパも、それを聞いて声をあげて泣きました。その上でナオミに言いました。「いいえ。私たちはあなたの民のところへあなたと一緒に帰ります」。なんとも忠義な嫁達でありましょうか。それは、ナオミの深い信仰に基づく生き方に彼らがひかれていたからでしょう。

3. 説得とその結果 (11～14節)

①帰りなさい (11～13節前半) ナオミは二人の嫁達が一緒に行くと言ってくれてうれしかったことでしょう。しかし、彼女は心を鬼にして「帰りなさい。娘達」と説得します。ナオミが言う理由というのはこうです。「①あなたがたの夫となるような息子がお腹にいない。②もう私は年で夫をもてない。③すぐに夫を持ち息子を産んだとしても成人するまでは時間がかかる」。ユダヤでは、夫が死んだ場合に妻はその夫の兄弟とまず結婚することになっていたからです (申命記 25:5)。

②ナオミの苦しみ (13節後半) ナオミは年を進めた自分とはもかくとして、若いやもめとなった彼らにはぜひとも再婚させたかったのです。ナオミは「いっしょに行くことはできないよ」といい、「私をひどく苦しめるから。」「主の御手が私に下ったのだから。」と理由をいいます。彼女の心の内が少しのぞけます。彼女には望む信仰はあったけれど、もう一方では、夫や息子達が死んだのは主からの試練であるという意識が強くあったのです (士師 12:15、ヨブ 19:21、詩篇 32:4 など)。

③オルパとルツ (14節) ナオミの説得に対して、嫁達は声をあげて泣きました。そして、オルパはそこまで言われるのであればと、しゅうとめと別れの口づけをしてモアブの母の家へと帰っていきました。一方のルツはどうでしたか。彼女は相変わらずナオミから去ろうとしません。すがりついていました。

《結論》 ナオミについて、夫と息子達の死により絶望したのと、ベツレヘムの状況が好転したから故郷に帰ろうと思いついたと考える人々もいるでしょう。しかし、そのような外的な理由だけでは帰るという決定的な理由にはならなかったでしょう。彼女が故郷への帰還を決めたのは、やはり祈りのうちにその導きを得たからではないでしょうか。確かに彼女の魂は不安定になっていたことはいなめないでしょう。自分は不幸を生み出す人間ではないかといった否定的な考えがなかったとはいえないでしょう。でも、それもルツ記には「主の御手がくださった」と記されていて、主が与えられた試練のようにとらえていることがわかります。それはそうでしょう。ヨブだって友人たちの中には「お前の罪がこんな不幸を生み出したのだ。」(ヨブ記 4:7-9)と責める人があり心は揺れました。アブラハムだって不信仰な思いになったこともありましたが、弱い人間ですから、その信仰には弱点もあったでしょう。ましてや夫も息子達も失くした人です。それを誰が責められましょう。そんななかでも、祈ることを忘れずに、信仰をもって故郷への帰還を決断したのでしょう。信仰一本でやってきたナオミの信仰的決断です。私達も試練の中でも、祈りましょう。主は祈りの中に良い決断を与えてくださることでありましょう。

